1）食器の合理的工夫と改善について

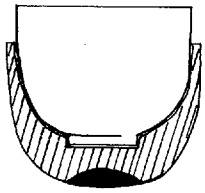
国立療養所西別府病院
長　野　珠　江　　本　田　ミヨ子
安　川　郁　子

<目　的>

５０年度筋ジス班会議において、食器の改良について報告したが、今回は、さらに食器の底部に再改良を試みた。

<方　法>

前回は、食器の底部に直接磁石を取り付けたが、高熱消毒に耐られず、また、ステンレス性盆上で食器をずらすことはできるが、傾けることができなかったので、今回は、磁石の利用を止め、図のような、おきあがりこぼしの原理を取り入れた食器受けを作成し、現在使用の汁食器をそれにのせた。



さらに、食器と食器受けの固定を計るため食器の一部と糸底が、食器受けと密着するようにした。取りはずしのできるようにしたことで、消毒の問題は解決された。

食器の口に指をかければ少しの力で食器を傾斜させることができ、中身も容易に取り出すことができるようになったが、元の位置にもどすとき、急に手を離すため汁が外に飛び出してしまった。そこで食器の規格がほぼ決っていることから、密閉容器のフタが利用できないかと考え、食器に合せたところ、合うものがあり、それを半分に切りフタをした。

食器にフタをしたことで、ある程度中身の飛び出しは解決された。

<考　察>

坐位にて食事は取ることができるが、体位が不安定で、手はオーバーテーブルの上においた位置から自由に動かすことのできない患児３名と臥床患児２名を対象として行った結果、食器を傾斜させることによって、今まで見えなかった、食器の中身も見え、目で食事を楽しむことができるようになり、中身も比較的容易に取り出すことができると好評を得た。

今まで、まったく汁物に手を出すことのなかった患児が、少しづつではあるが、汁物に手を出してくれた。

<おわりに>

少しでも快適な食事が、できるようにと、食器の工夫に取りかかってみたものの、各人にあった食器を見つけ出す困難さを痛感させられた。まだまだ改良を要する問題も残っているが、患児に多少で

も好評を得たと思われるので、ここに発表し皆様の御批判を仰ぎたいと思う。

尚、食器受けの作成に当り、「太陽の家」「福岡技肢製作所」の方々に、御協力を頂いた。

<注> 食器受けの材質

現在使用のしる食器に薄いメリヤス布を数回巻き底に鉛を置き、その上からポリエステル樹脂化工したもの。　　全重量――150g　　鉛――80g

2) スライドストレッチャーの使用経験

国立療養所西別府病院
百武　多津子　　茅野　恵子
後藤　スミエ

<目　的>

今回、スライドストレッチャーを使用する機会を得たが、このストレッチャーが従来のものと大きく異なる点は、①スライドができる。②背もたれが挙上できる。という2点である。そこで、その使用結果についてまとめさらにどのような点に留意すれば、より効果的な活用ができるか検討することにした。

<方　法>

この使用結果をまとめるにあたって、看護者とこのストレッチャーの使用が多かった患者20名に、看護者には機能性を、患者には安楽性を中心にアンケートをとった。

<結　果>

《看護者側》

利点 ① 背もたれを挙上させることにより、患者を抱える時にかかる看護者の腰背部への負担が少ない。

② ストレッチャーの移動が容易にできる。

③ けこみがよいため、患者を抱える時に看護者がストレッチャーに身体を十分密着させることができる。

欠点 ① ベッド間隔が狭いので、スライドの使用が不便である。

② 高さが、ベッドや看護者にとって高すぎる。

《患者側》

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<目的>

50 年度筋ジス班会議において、食器の改良について報告したが、今回は、さらに食器の底部に再改良を試みた。